

「承認しなくつても、實際蒼くなつたら仕方がないわ、貴方」

「さう。——それから硬くなりましたね」

「え、硬くなつたのは自分にも分つておりましたわ。もう少しあの儘で我慢してゐたら倒れたかも知れないと思つた位ですもの」

「つまり驚ろいたんでせう」

「え、随分吃驚したわ」

「それで」と云ひ掛けた津田は、俯向加減になつて鄭寧に林檎の皮を剥いてゐる清子の手先を眺めた。滴るやうに色付いた皮が、ナイフの刃を洩れながら、ぐる／＼と剥けて落ちる後に、水の多さうな薄蒼い肉が次第に現はれて来る變化は彼に一年以上経つた昔を憶ひ起させた。

「あの時この人は、丁度斯ういふ姿勢で、斯ういふ林檎を剥いて呉れたんだつけ」  
ナイフの持ち方、指の運び方、兩肘を膝とすれ／＼にして、長い袂を外へ開いてゐる具合、ことごとく其時の模寫であつたうちに、たゞ一つ違ふ所のある點に津田は氣が付いた。それは彼女の指を飾る美しい二個の寶石であつた。若しそれが彼女の結婚を永久に記念するならば、其ぎ

ら／＼した小さい光程、津田と彼女の間に鋭どく遮るものはなかつた。柔婉に動く彼女の手先を見詰めてゐる彼の眼は、當時を回想するうつとりした夢の消息のうちに、燦然たる警戒の閃めきを認めなければならなかつた。

彼はすぐ清子の手から眼を放して、其髪を見た。然し今朝下女が結つたといふ其髪は通例の底であつた。何の奇も認められない黒い光澤が、櫛の齒を入れた痕を、行儀正しく堅に残してゐる丈であつた。

津田は思ひ切つて、一旦捨てやうとした言葉を又取り上げた。

「それで僕の訊きたいのはですわね——」

清子は顔を上げなかつた。津田はそれでも構はずに後を續けた。

「昨夕そんなに驚ろいた貴女が、今朝は又何うしてそんなに平氣でゐられるんでせう」  
清子は俯向いた儘答へた。

「何故」

「僕にや其心理作用が解らないから伺ふんです」



清子は矢つ張り津田を見ずに答へた。

「心理作用なんて六づかしいものは私にも解らないわ。たゞ昨夕はあゝで、今朝は斯うなの。それ文よ」

「説明はそれ文なんですか」

「えゝそれ文よ」

もし芝居をする氣なら、津田は此所で一つ溜息を吐く所であつた。けれども彼には押し切つてそれを遣る勇氣がなかつた。此女の前にそんな眞似をしても始まらないといふ氣が、技巧に走らうとする彼を何處となく抑へ付けた。

「然し貴女は今朝何時もの時間に起きなかつたぢやありませんか」

清子は此問を掛けるや否や顔を上げた。

「あら何うしてそんな事を御承知なの」

「ちやんと知つてるんです」

清子は一寸津田を見た眼をすぐ下へ落した。さうして綺麗に剃いた林檎に刃を入れながら答へ

た。

「成程貴方は天眼通でなくつて天鼻通ね。實際能く利くのね」

冗談とも諷刺とも眞面目とも片の付かない此一言の前に、津田は退避いだ。

清子は漸く剃き終つた林檎を津田の前へ押し遣つた。

「貴方いかゞ」

## 百八十八

津田は清子の剃いてくれた林檎に手を觸れなかつた。

「貴女いかゞです、折角吉川の奥さんが貴女のためにといつて贈つてくれたんですよ」

「さうね、さうして貴方が又わざ／＼それを此所迄持つて来て下さつたんですね。その御親切に對しても頂かなくつちや悪いわね」

清子は斯う云ひながら、二人の間にある林檎の一片を手にとつた。然しそれを口へ持つて行く前に又訊いた。

暗明



「然し考へると可笑いわね、一體何うしたんでせう」

「何が何うしたんです」

「私吉川の奥さんにお見舞を頂かうとは思はなかつたのよ。それから其お見舞をまた貴方が持つて来て下さらうとは猶更思はなかつたのよ」

津田は口のうちに「さうでせう、僕でさへそんな事は思はなかつたんだから」と云つた。其顔を睨と見守つた清子の眼に、判然した答を津田から待ち受けるやうな豫期の光が射した。彼は其光に對する特殊な記憶を呼び起した。

「あゝ此眼だつけ」

二人の間に何度も繰り返された過去の光景が、あり／＼と津田の前に浮き上つた。其時分の清子は津田と名のつく一人の男を信じてゐた。だから凡ての知識を彼から仰いだ。あらゆる疑問の解決を彼に求めた。自分に解らない未來を擧げて、彼の上に投げ掛けるやうに見えた。従つて彼女の眼は動いても靜であつた。何か訊かうとするうちに、信と平和の輝きがあつた。彼は其輝きを一人で専有する特權を有つて生れて來たやうな氣がした。自分があればこそ此眼も存在するの

だどさへ思つた。

二人は遂に離れた。さうして又會つた。自分を離れた以後の清子に、昔の儘の眼が、昔と違つた意味で、矢つぱり存在してゐるのだと注意されたやうな心持のした時、津田は一種の感慨に打たれた。

「それは貴方の美くしい所です。けれどももう私を失望させる美しさに過ぎなくなつたのですか。判然教へて下さい」

津田の疑問と清子の疑問が暫時視線の上で行き合つた後、最初に眼を引いたものは清子であつた。津田は其退き方を見た。さうして其所にも二人の間にある意氣込の相違を認めた。彼女は何處迄も逼らなかつた。何うでも構はないといふ風に、眼を餘所へ持つて行つた彼女は、それを床の間に活けてある寒菊の花の上に落した。

眼で逃げられた津田は、口で追掛ければならなかつた。

「なんぼ僕だつて唯吉川の奥さんの使に來た丈ぢやありません」

「でせう、だから變なのよ」



「ちつとも變な事はありませんよ。僕は僕で獨立して此所へ來ようと思つてる所へ、奥さんに會つて、始めて貴女の此所にゐらつしやる事を聽かされた上に、ついお土産迄頼まれちまつたんです」

「さうでせう。さうでもなければ、何う考へたつて變ですからね」

「いくら變だつて偶然といふ事も世の中にはありますよ。さう貴女のやうに……」

「だからもう變ぢやないのよ。譯さへ伺へば、何でも當り前になつちまふのね」

津田はつい「此方でも其譯を訊きに來たんだ」と云ひたくなつた。然し何にも其所に頓着してゐないらしい清子の質問は正直であつた。

「それで貴方も何處かお悪いの」

津田は言葉少なに病氣の顛末を説明した。清子は云つた。

「でも結構ね、貴方は。さういふ時に會社の方の御都合が付くんだから。其所へ行くと良人なんか氣の毒なものよ、朝から晩迄忙がしさうにして」

「關君こそ酔興なんだから仕方がない」

「可哀想に、まさか」

「いや僕のいふのは善い意味での酔興ですよ。つまり勉強家といふ事です」

「まあ、お上手だ事」

此時下から急ぎ足で階子段を上つて來る草履の音が聽えたので、何か云はうとした津田は黙つて様子を見た。すると先刻とは違つた下女が其所へ顔を出した。

「あの濱のお客さまが、奥さまにお午から瀧の方へ散歩にお出になりませんか、伺つて來いと仰しやいました」

「お供ませう」清子の返事を聽いた下女は、立ち際に津田の方を見ながら「旦那様も一所に

入らつしやいまし」と云つた。

「有難う。時にもうお午なのかい」

「え、只今御飯を持つて參ります」

「驚ろいたな」

津田は漸く立ち上つた。



「奥さん」と云はうとして、云ひ損なつた彼はつい「清子さん」と呼び掛けた。

「貴女は何時頃迄お出です」

「豫定なんか丸でないのよ。宅から電報が来れば、今日にでも歸らなくつちやならないわ」

津田は驚ろいた。

「そんなものが来るんですか」

「そりや何とも云へないわ」

清子は斯う云つて微笑した。津田は其微笑の意味を一人で説明しようとして試みながら自分の室に歸つた。

— 未完 —

解 説



## 『明暗』解説

『明暗』は、大正五年五月二十六日から大正五年十二月十四日まで、百八十八回に亘つて東西の朝日新聞に連載され、未完成のまままで終つた、漱石最後の小説である。漱石は十一月二十二日に發病して、十二月九日に竟に起たなくなつた。然し漱石は發病前に少し書き溜めてゐたので、小説は、漱石の死後なほ五日間、新聞紙上に連載された。この事は當時の多くの讀者に、何か悽愴な感じを與へた。

然しそれよりもつと悽愴な感じに襲はれたのは、漱石の死後、漱石が日日それに凭つて『明暗』を書いてゐた紫檀の卓の上に、いつもの通り眞中にキチンと原稿紙が積み重ねてあつて、その一番上の原稿紙の右の肩に、小さく189と、漱石の手蹟で書いてあるのを發見した時であつた。嚴密に言へば、是が漱石の絶筆なのである。さうして是は、恐らく十一月二十一日漱石が『明暗』の第百八十八回を書いてしまつたあと、明日書くのは第百八十九回であるといふ事を忘れない爲



に、此所に書きつけて置いたものに違ひないのである。然しその翌日の十一月二十二日には、漱石は、胃部の不安と苦痛との爲に、その189と心覺えに書きつけた原稿紙の上に突つ伏したまま、一字一行も書く事が出来ず、午後には到頭床をとつてもらつて寝込んでしまはなければならなかつた。さうして十二月九日午後六時四十分には、到頭不歸の客とならなければならなかつた。

漱石が腰を据えて、もつとずつと長く『明暗』を書き続ける氣でゐた事は、漱石が十一月十六日成瀬正一に宛てて、「『明暗』は長くなる許で困ります。まだ書いてゐます。來年迄つゞくでせう。」と書いてゐるのを見ても、十分想像する事が出来る。然しそれよりもずつと前、既に八月二十四日に漱石は、芥川龍之介と久米正雄とに宛てて、「牛になる事はどうしても必要です。吾々とはかく馬になりたがるが、牛には中々なり切れないです。僕のやうな老獪なものでも、只今牛と馬とつがつて孕める事ある相の子位な程度のものです。／＼あせつては不可せん。頭を悪くしては不可せん。根氣づくでお出でなさい。世の中は根氣の前に頭を下げる事を知つてゐますが、火花の前には一瞬の記憶しか與へて呉れません。うん／＼死ぬ迄押すのです。それ文です。決して相手を拵らへてそれを押しちや不可せん。相手はいくらでも後から後からと出て來ます。さうして吾々を惱ませます。牛は超然として押し行行くのです。何を押しかと聞くなら申します。人間

を押すのです。文士を押すのではありません。」と書いてゐる。無論是は、是から文壇に打つて出ようとしてゐる若い二人に對する、先輩としての漱石の忠告であり、又その限りに於いては、是ほど適切な忠告もないと言つて可かつたのではあるが、然しそれとともに是は、漱石の、自身自身に對する——特に『明暗』を百回近くも書き込んで來てゐながら、まだいつ結末になるともはつきりした見透しがつけられないやうな状態に置かれた、自分自身に對する、副意識的の、忠告でもあり、決意の宣言でもあつたやうに、私には思はれる。自分は目下の所、「牛と馬とつがつて孕める事ある相の子」程度のものに過ぎないと言つてゐる漱石には、「とかく馬になりたがる」自分を押へて、牛に「なり切」りたい意志が、此所で十分動いてゐるのである。然しそれほど覺悟をきはめ、それほど腰を据えて、この仕事に立ち向かつたのにも拘はらず、天は竟に漱石に『明暗』を完成する事を許さなかつた。漱石から言へば、是ほど遺憾な事はなかつたに違ひない。當時漱石が「死ぬと困るから」と言つた言葉を捉まへて、漱石の往生際の悪い事を冷評した作家もあつたやうであるが、是だけ心を打ち込んだ仕事を、しされたままで死ぬ事は、漱石にとつて死んでも死にきれない心残りな事であつたのは、言ふまでもない事である。

漱石は『明暗』を書いてゐながら、その世界の不愉快な氣分から遁がれ出る爲に、毎日午後か



ら夜へかけて、或は漢詩を作り、或は書や畫をかい、頭の洗濯をしてゐたと、言はれる。是は既に大正五年八月二十一日久米正雄と芥川龍之介とに與へた手紙の中で、漱石自身「僕は不相變『明暗』を午前中書いてゐます。心持は苦痛、快樂、器械的、此三つをかねてゐます。存外涼しいのが何より仕合せです。夫でも毎日百回近くもあんな事を書いてゐると大いに俗了された心持になりますので三四日前から午後の日課として漢詩を作ります。日に一つ位です。さうして七言律です。中々出来ません。厭になればすぐ已めるのだからいくつ出来るか分かりません。」と言つてゐるのだから、抗論の餘地がない。その上『明暗』の世界は、誰が讀んで見ても、決して愉快な世界ではないのである。かういふ世界に長い間首を突つ込んで、その世界の空氣を二六時中吐吞して暮らさなければならぬとすれば、それは假令その作者でないとしても、今にも窒息しやうな、やりきれない氣持になるに違ひない事は、言を俟たない。漱石が「大いに俗了された心持」になり、それを洗ひ淨める爲に、漢詩を作る事を日課にし始めたといふ事は、寧ろ當然の事であると言つて可いのである。

ただ區別を要する事は、その事實が直ちに、漱石が『明暗』そのものを創造する事に不愉快を感じたといふ事を、意味するものではないといふ事である。漱石が『明暗』で取り扱つた世界は、不愉快な世界であつたには違ひない。又その世界の中に長い間頭を浸けてゐる事は、漱石にとつて、自分自身の世界を「俗了」する事であつたには違ひない。然しもし此所に漱石の中に、漱石を導くより高きイデーがあつて、そのより高きイデーに仕へる爲には、是が非でもこの不愉快な世界の中に潜り込まなければならなかつたのだとすれば、漱石にその事が愉快・不愉快であるに論なく、漱石が敢然その中に跳り込まなければならなかつた事は、言ふまでもない事である。即ち漱石は、自分の中より高きイデーに仕へ得る事の歡びの爲に、小さな私の快・不快など、犠牲にして省みまいとするのである。事實漱石は、自分の『明暗』を書く「心持は苦痛、快樂、器械的、此三つをかねてゐるのだと言つてゐる。

のみならず漱石は同じ手紙の中で、「尋仙未向碧山行。住在人間足道情。明暗雙雙三萬字。撫摩石印自由成」といふ自作の漢詩を、相手に披露さへもしてゐるのである。勿論漱石はこの際、「明暗雙々といふのは禪家で用ひる熟字であります。三萬字は好加減です。原稿紙で勘定すると新聞一回分が一千八百字位あります。だから百回に見積ると十八萬字になります。然し明暗雙々十八萬字では字が多くつて平仄が差支へるので致し方がありません故三萬字で御免を蒙りました。結局に自由成とあるは少々手前味噌めきますが、是も自然の成行上已を得ないと思つて下さい」と、多少辯解を試みてはゐる。然し此所に漱石の、自分のして來た仕事を、ある満足を持つてふり返へつて見てゐる心持が出てゐる事は、争はれない。少くともかういふ詩は、厭厭『明暗』を書い



てゐる心持からは、到底生れて來やうがないのである。

その上、文獻的に言つても、この八月二十一日の手紙以外、漱石が『明暗』を書いてゐて、多少でも不愉快な思ひを経験しなければならなかつた趣を洩してゐるものは、外に何所にも見當らないのである。反對に、例へば八月五日和辻哲郎宛の手紙の中には、「此夏は大變凌ぎいゝやうで毎日小説を書くのも苦痛がない位です僕は庭の芭蕉の傍に疊み椅子を置いて其上に寐てゐます好い心持です身體の具合か小説を書くのも骨が折れませんが却つて愉快を感じます事があります長い夏の日を藝術的な努力で暮らすのはそれ自身に於て甚だ好い心持なのです其精神は身體の快樂に變化します僕の考では凡ての快樂は最後に生理的なものにリデュースされるのです。賛成出來ませぬか。」と書いてありさへもする。八月十八日久保頼江宛の手紙の中には、「小説をほめて下すつて有難う。何だか馬鹿に長くなりさうで弱ります。然し此夏は大變凌ぎやすいので書くのに骨が折れないで仕合せです」とあり、八月二十一日久米正雄・芥川龍之介宛の手紙の終にも、「私はこんな長い手紙をたゞ書くのです。永い日が何時迄もつゞいて何うしても日が暮れないといふ證據に書くのです。さういふ心持の中に入つてゐる自分を君等に紹介する爲に書くのです。夫からさういふ心持でゐる事を自分で味つて見るために書くのです。日は長いのです。四方は蟬の聲で埋つてゐます。」とある。漱石は、自分の命根を嚙む潰瘍が、恐らく黙黙として爆發の準備を續

けてゐるのにも氣がつかずに、自分の「生理的なものにリデュースされ」た快樂を味はひ樂しみつつ、寧ろいそいそと『明暗』を書いて行つてゐるやうなのである。——事實また、自分が自分の腰を据ゑ、魂を打ち込んで書くものが、著者として眼鼻立を整へて行くといふ事が、一人の藝術家にとつて、嬉しくない筈がない。

一つの藝術を創造する者にとつて、その創造に必然に隨伴する艱難を克服するに際して、多くの苦痛を経験しなければならぬのは、當然である。同時に、一つのより高いイデーに仕へようとする者が、そのイデーに仕へる事から生ずる、あらゆる艱難と苦痛とを堪へ通さなければならぬのも、亦當然の事である。然もそれらの艱難と苦痛とは、創造の歡びやより高いイデーに仕へる歡びに比べれば、殆んど物の數にも足りない、小さなものであるに過ぎなかつた。また、さう感じ得るものでなければ、本式に、より高いイデーに仕へたり、一つの藝術を創造したりする氣に、なれるものではないのである。漱石は、それらの艱難と苦痛とを堪へ通す爲に、一方では、或は漢詩を作り、或は書をかき畫をかけた。漢詩や書畫は、漱石にとつて、言はば潜水服のやうなものである。是で身を固める事によつて、漱石は安んじて、人間の心の海の、怖ろしい深みへ潜つて行き、其所で無限に續く、自分の探險事業に従事する事が出来るのである。それだから漱



石は、牛のやうに「超然として押しに行く」覺悟で、平然として『明暗』は「來年迄つゞくでせう」といふ。然も漱石が敢て「來年迄つゞくでせう」と言ひ得たといふ事は、漱石がこの仕事を續けて行く事に、十分の歡びを持つてゐたといふ事を證明する。

漱石が、それに仕へる事を無上の歡びとした、より高きイデーとは何であるか。——それは言ふまでもなく、漱石の所謂「則天去私」の世界である。天に則つて私を去る世界である。換言すれば、漱石が、人間の心の奥深く巢喰つてゐるエゴイズムを摘出して、人人に反省の機會を與へ、それによつて自然な、自由な、朗らかな、道理のみが支配する世界へ、人人を連れ込もうとする事である。

恐らく大正五年の三月下旬に書かれたものらしい日記の中に、漱石は「己は臆病かも知れない。鷹揚でないかも知れない。然し正しいのだ。正しいものとして正しくないものを打ち倒さうとするのだ。故なく他を損ふものを嫉むから、そんなものはどうして「も」打ち懲らさなければならぬといふ氣がむら／＼と湧いて出て、この己を不安にするのである。己の落付のないのは巡查や探偵が眼を皿のやうにして良民を害する悪者を捕へやうと一生懸命に氣を遣つてゐるやうなものだ」と書いてゐる。漱石は昔からこの「正しい」、道理の世界に立つて生きて來た。然し漱石を取

り巻く周圍の世界は、すべて「正しくない」、道理に戻つた世界に立つて平氣であつた。それが漱石を不安にし、漱石に「そんなものはどうして「も」打ち懲らさなければならぬといふ氣」を「むら／＼と湧」き立たせ、漱石をして、漱石の藝術を採り上げしめるのである。——かうして出來上がったものが、漱石の初期の作品であつた。

然るに修善寺の大患以來、漱石の心は、特に次第に内へ向き始めた。「正しくない」、道理に戻つた生活をする他人を憎む點では、漱石の態度は以前と少しも變る事がなかつた。それは大正五年の日記に就いて見ても明白である。然し修善寺大患後の漱石は、「正しい」、道理の世界に立つて生活してゐると信じ切つてゐた自分の中にも、なほ且つ「正しくない」、道理に戻つた世界が、掘り出せばいくらでもある事を發見して、他人を憎むとともに、自分をも憎まずにはゐられない、特別な立場に置かれるのである。是は漱石にとつて、正に一大事であつた。他人の事どころではない。みんな自分の身の上の事である。かうして漱石は、自分自身の心の修業を問題にし出した。勿論前期の漱石に、この問題が、少しも採り上げられなかつたと、言ふのではない。然し死の問題とともにこの問題が、特に修善寺の大患以來、殊にその後年年の潰瘍以來、痛切に漱石の問題となり出すのである。漱石には、他人の私とともに、自分の私に氣になり始めた。他人の私を點檢するとともに、自分の私を點檢しなければならなくなつた。氣がついて見ると、自分の中に



は、醜いもの奇怪なものが、陰の壁の中に隠れてゐて、うぢやうぢやしてゐる。漱石はそれを曳き摺り出しては、一一克明に、我我の眼の前に列べて見せる。——それは前期の作品に於けるよりは、更に精到な、更に深刻な、更に説伏力を伴つた、「正しくない」事、道理に戻つた事の、別決であつた。他人の私を捕捉したものを、自分の私を捕捉したもので裏打し、それを言はば告白の形で世間の前に提供するのである。その別決に壓力があるのも、當然であつた。それによつて我我は、我我の中にも亦さういふ醜いものが、いくらでも潜んでゐる事を、悲しく認識せざるを得なくなると同時に、何等かの方法で、一日も早くさういふものから脱却する事を、希望せざるを得なくなるのである。それは、漱石によつて別決されたものが、誰の私、彼の私といふのではなくて、一般人間の私として、我我に肉薄して来るやうになつてゐるからである。

かうして漱石は、修善寺大患以來、常に我我の眉間に、醜いものを突きつけ通した。然し漱石は、單に我我を不愉快にする爲に、さういふ事をしたのではなかつた。我我を不愉快にする事によつて、我我に、一日も早くその不愉快なものから脱却する事を希望せしめようとするのが、漱石の大目的なのである。即ち漱石はそれによつて、自分が自分のモットオとして選んだ言葉のやうに、人人をして、天に則つて私を去らせようとするのである。恐らくは大正五年の五月の末、即ち『明暗』が新聞に連載され始める前後位に書かれたものらしい日記に、漱石は「倫理的にし

て始めて藝術的なり。眞に藝術的なるものは必ず倫理的なり」といふ、自分の信條を書き誌してゐる。より高きイデーに仕へる意志なくして、人は倫理的である事は出来ない。——この言葉は、漱石の全藝術の本質を理解する上に、重要な鍵であるとともに、特に『明暗』を理解する上に、最も重要な鍵であると、私は思ふ。

その構成の見事に建築的な點から言つても、その描寫の密度の恐るべく緻密な點から言つても、その登場人物の驚くべく多種多様な點から言つても、然もその多くの副人物が主人公との關係に於いて、極めて抜き差しならない重要な役目を勤めてゐる點から言つても、『明暗』は、漱石の作品のみならず、明治・大正・昭和を通じて、恐らく類例のない、ユニークな作品である。然し更に驚嘆すべき事は、その緻密な描寫の密度をもつて描き出してゐる所のもものが、すべて人間のエゴイズムス——人間の私であるといふ事である。是ほど精細に、是ほど敏活に、また是ほど深刻に、人間の私を掘り起して見せたものは、西洋に於いても、殆んどその比を見ない。然もその私もしくは我の描寫は、人を異常な事件の中に置いて見せるといふやうな方法ではなく、單に主人公が病氣で入院し、その病氣が癒つて轉地するといふ、極めて家常茶飯の事件に於いて行はれるのである。



勿論漱石から言へば、戯曲的な大事件の中に置かれて、人間が發揮する私もしくは我を描き出すといふ事は、寧ろ陳腐であり、それよりも人は、日常の生活に於いて、行住坐臥に私もしくは我を發揮して、少しもそれを反省しないであらうといふ點に、それを指摘する興味と必要とが痛感されたものに相違ない。然しこの仕事は、それだけに、普通以上の眼力と普通以上の手腕とを必要とする仕事であつた事は、説明するを要しない。殊にかういふ家常茶飯事を、新聞の續き物として書き、然もそれを百回以上に互つて書き續けつつ、なほ一般讀者の興味をその小説の上に繋ぎ留めて置く爲には、描寫が絶えず活活してゐなければならぬのは無論の事、歩一人を心の深所に連れ込む事によつて、絶えず展望を新たにし、もしくは問題が絶えず進展して、一歩も停滞したり重複したりする事を許さないからである。その爲めには漱石は、一方では津田とお延との心の底に分け入るとともに、一方ではそれから来る世界の狭さと世界の單調とを避ける爲に、津田とお延とに、いろんな人といろいろに交渉させなければならなかつた。この點では漱石は、隨分苦心したやうである。漱石は、例へば小林のやうな、是までの漱石の作品の中では、あまり見かけた事もないやうな、妙な人物を點綴して來て見たり、或はお秀とお延とを津田の入院してゐる病院で落ち合はさせ、其所で二人にひどく戯曲的な場面を演じさせて見たり、或はお延をしてお秀を訪問せしめ、夫婦の愛に就いて論じさせて見たり、或はお延一人を芝居にやつて、其所

で繼子の見合の立合をさせて見たり、又それに連れて不意に吉川夫人に會はせて見たり、その他『明暗』の世界に幅と變化とを與へる爲に、あらゆる工夫を凝してゐるのである。さうしてそれは、ある意味から言へば、『明暗』の世界に、全然拵へもののやうな感じをさへ與へる、際どい所まで行つてゐる。

然し重要な事は、漱石がいくら工夫して局面の轉換を試みてゐても、漱石は決して自分の大目的を疎かにしなかつたといふ事である。如何なる場面がいかに出て來やうとも、漱石は決して、自分の身を落して、讀者に媚びようとはしてゐない。反對に漱石は、その場面その場面で、あらゆる人にその人らしく振舞はしめつつ、その人にこびりついてゐる私もしくは我が、その人流に發現する瞬間を、實に注意深く見成つて、それを刻刻に我我に報告する。従つてその人物もしくはその場面は、始めの間は何か此方に馴染まないものを感じさせる場合もあり得るに拘はらず、『明暗』全體の構成の中に置いて考へれば、それは、少しも不都合なものでもなんでもなく、寧ろ『明暗』の世界の中では、必然のものであり、それあるが爲に『明暗』の世界の中に生きて動いてゐるすべての人間の私は、一層鮮やかに我我の眼の中に跳り込んで來るやうな仕組になつてゐる事に、我我は初めて氣がつくのである。——普通の意味での拵へものは、此所では拵へものにならない。拵へものと見えたのは、實はいろんな人間の私を、更に廓大して見せる爲めの、一



つの科學的な實驗裝置のやうなものだつたのである。

お秀が津田を病院に訪ねて、津田に必要な金を用達てようとする。津田は、金は欲しいがお秀に頭を下げる事を欲しない。頭を下げないでゐながら、その金をお秀に置いて行かせようとする。然しお秀はこの機會に兄が我を折つて、素直な心持で自分の好意を受け入れてくれる事を、希望してやまない。従つて御互は御互の我に災ひされて、出さうとする者は出せなくなり、欲しいと思ふ者ももらへなくなつてしまふ。其所へお延が這入り込んで来る。お秀はお延に對して、小姑の依怙を持つてゐる。お延は津田の批評を受け襲いで、お秀を謂はれなく輕蔑してゐる。その上お延は、丁度その時、岡本からもらつて來た計りの、必要以上の額面の小切手を懐ろにしてゐる。金の爲に津田がお秀から苦しめられてゐると知つて、そのお延が黙つてゐる筈がない。何を猪口才なといひでもするやうに、お延はお秀の見てゐる前で、津田にその小切手を渡し、自分達の事は自分達で處理するから、餘計なお節介はしてはなくても可いといふやうな身構へで、お秀を冷笑する。お秀はお秀で、自分の好意が無になつたのみならず、反つてその好意が冷笑をもつて蹂躪されてしまふのに、黙つてゐる事が出來ず、兄夫婦の前に置いて、自分が不斷から兄夫婦に就いて考へてゐる事を、思ひ切つてぶちまけてしまふ。——所謂自然主義者から言へば、この

場面は、普通には先づありさうもない、お芝居であるに違ひない。無論私も、是が芝居がかりの場面である事を、否定しはしない。然しこの場面がある爲に、津田の人となり、お延の人となりと、お秀の人となりとが、千萬言を費して説明されるよりも、もつと手つ取り早く、もつと具體的に我我に告知知らされるとすれば、——然もこの場面の存在が、『明暗』全體の構成の上になくてならぬ一部分を構成し、爾後の津田やお延の生活のみならず、お秀の生活の上にも吉川夫人の生活の上にも、相當重大な影響を持つものであるとすれば、——是は『明暗』一篇にとつて、必然の場面であると言はなければならない、特別な場面なのである。漱石は、明治四十一年十一月七日の『田山花袋君に答ふ』の中で、「拵へものを苦しにせらるゝよりも、生きて居るとしか思へぬ人間や、自然としか思へぬ脚色を拵へる方を苦心したら、どうだらう。拵らへた人間が活きてゐるとしか思へなくつて、拵らへた脚色が自然としか思へぬならば、拵へた作者は一種のクリエーターである。拵へた事を誇りと心得る方が當然である。」と言つてゐる。

説解

漱石の作品が、それを中樞として旋回してゐたものは、愛の問題である。漱石の一生は、愛の爲に悩み續けた一生であると言つて可い。修善寺大患以後の作品に就いて考へて見ても、『彼岸過迄』の中心問題をなすものは、須永の千代子に對する、不思議な、複雑な戀愛であつた。『行人』



の一郎は、誠實に純粹にお直を愛してゐるにも拘はらず、お直がどうしても純粹な誠實な愛をもつて自分に對してゐる氣がしない爲に、お直は自分以外の誰かに心を通はせてゐるのではないかといふ、疑惑に惱まされ通してである。「心」の先生は、愛するが故に嫉妬し、嫉妬するが故に自分の親友の運命に狂ひを興へたが爲に、折角愛する相手を獲得する事が出来、その相手は自分をあらゆる誠實と純情とをもつて愛してくれるにも拘はらず、その人を大手を廣げて抱き締る事の出来ない、不幸の生活を送らなければならなかつた。「道草」の健三は、自分自身の天職としての自分の仕事の完成に焦りながら、家族や周囲の者の爲に、心にもない仕事に貴重な時間と精力とを浪費しなければならぬのであるが、然もその健三の、最も靦面に惱まなければならなかつたものは、自分と自分の妻のお住との、愛の問題であつた。「明暗」に於ける中心問題もまた、愛の問題である。夫婦間の愛の問題である。

ただ『明暗』が是までの作品と違ふ所は、漱石が、主人公の津田とともに、女主人公のお延を、お延の内部から描いてゐるといふ事である。この點では『道草』は、『明暗』の習作であつたと言ふ事も出来る。然しその外の作品では、漱石は愛を、すべて男の側からのみ描いた。千代子と須永との戀愛でも、お直と一郎との戀愛でも、奥さんと先生との戀愛でも、漱石は、常に自分の立場を男の側だけに据ゑ、男の内部だけに立ち入り、男の嫉妬、男の疑惑、男の苦惱、男の孤獨――

――すべて男の心理のみを描いた。無論漱石はその際、一往は女の心の内部に立ち入つて見てゐるのである。それでなければ小説は書けるものではない。然し漱石の是までの作品に現はれる女は、お住を除いて、いつでも、その作品の主人公から觀られた女――従つて外側から眺められた女であるに止まつて、讀者にその内側を覗き込ませるものがなかつた。然るに『明暗』では漱石は、一方主人公津田の内部に立ち入るとともに、一方津田の妻君のお延の内部に立ち入り、兩兩相對してその心理描寫を、實に克明に書き續けて行くのである。是は或は漱石が、この夫婦の間に横たはつてゐる溝が、單に津田一人の罪から來るものではなく、お延も亦その持つて生れた性格上、當然その責の一半を負はなければならないといふ意見を持つてゐる爲に、自然かういふ手段に出る必要があつたのかも知れないと思はれる。それも恐らくあるであらう。「道草」の場合は、逆な關係で、正にさうである。然しこの場合もつと必然に考へられる事は、すべての人間は、人間として生れたが故の弱點を持つてゐる、この弱點を反省し、この弱點を乗り越さうと努めるのでなければ、竟に人間には、愛と平和との理想的な世界が出現する期は望み難い、凡そ世上に愛の名に於いて行はれてゐる多くの行爲は、畢竟醜い私を覆ふ體裁の薄紗に過ぎないといふ、漱石の哲學が、此所にかういふ方法をとつて、自分自身を具體的に表現しようとしたものに違ひないといふ事である。――お延は津田を愛してゐる。然し津田は、お延が要求してゐる如くには、お



延を愛しない。津田は津田の持つて生れた性格の故に、お延が要求してゐる如くには、お延を愛しないとともに、お延と結婚する前の戀愛事件の結果としても、お延が要求してゐる如くには、お延を愛しない。然もお延は、自分が津田を愛してゐる以上、自分は津田をして、是が非でも自分を愛させずには措かないといふ、強い意志を持つてゐるのである。然もお延のその意志の奥には、津田への愛とともに、エゴイステイシユな、自分自身への愛があつた。自尊心といふか、虚榮といふか、氣位といふか、ともかくお延の——私がまじつてゐた。然もお延が要求する津田の愛はまた、自分だけを女と思ひ、外の女はすべて枯草と思へといふやうな、排他的な、獨占的な、私に充ちた愛だつたのである。さういふお延が、さういふ動機と目的を持つて、津田に働らきかけ、津田以外の人人に働らきかけるとすれば、その言動がいかに私に充ちた言動であつたかは、説明するを要しない。然もそのお延の私を、お延の一舉一動について指摘する爲には、讀者にお延の動機と目的とをはつきりさせて置く必要があり、讀者にお延の動機と目的とをはつきりさせる爲には、どうしても漱石は、お延の内部に立ち入り、外に現はれる事のないお延の内部を、人人に攫み出して來て見せる必要があつたのである。

同じ事が津田に就いても言へる。津田を奥底の方で動かすもの、さうして一一の刺激に會つて、一一に反應はするが、決して一一外に流れ出る事のない津田の心は、津田の内部に立ち入つて描

くより、描きやうはないのである。殊に津田のやうな裏表の多い人間にあつて、それは一層必要な事であつた。漱石から言へば、漱石は或は『明暗』に出て來るすべての人物の内部に立ち入つて、暗い奥に潜んでゐる醜いものを、明るみへ持ち出したかつたのかも知れない。然しそれは、一人の藝術家の仕事として、到底不可能の事である。またさうする事によつて、果して一つの作品の統一が、完全に保たれ得るかどうかも、疑問である。それだから漱石は、一往それを津田とお延との二人に限り、言はば是を世間の男の代表者・女の代表者として、二人の心理描寫に、その全力を集中しようとするのである。さうして漱石は會話以外、地の文によつて、或は吉川夫人、或は小林、或はお秀、或は津田の父、その他いろんな人のいろんな私のありどころを、機宜に應じて指摘して行かうとするのである。津田とお延とのみならず、あらゆる場合のあらゆる人の私、が指摘し悉されてゐるといふ意味では『明暗』は、新しい百鬼夜行之圖であると言つて可いかも知れない。

大正三年十一月十四日漱石は林原耕三に宛てた手紙の中で、「私が生より死を擇ぶといふのを二度もつゞけて聞かせる積ではなかつたけれどもつい時の拍子であんな事を云つたのです然しそれは嘘でも笑談でもない死んだら皆に柩の前で萬歳を唱へてもらひたいと本當に思つてゐる、私



は意識が生んすべてであると考へるが同じ意識が私の全部とは思はない死んでも自分「は」ある、しかも本来の自分には死んで始めて還れるのだと考へてゐる。私は今の所自殺を好まない恐らく生きる丈生きてゐるだらうさうして其生きてゐるうちは普通の人間の如く私の持つて生れた弱點を發揮するだらうと思ふ、私は夫が生だと考へるからである。私は生の苦痛を厭ふと同時に無理に生から死に移る甚しき苦痛を一番厭ふ、だから自殺はやり度ない。夫から私の死を擇ぶのは悲觀ではない厭世觀なのである。悲觀と厭世の區別は君にも御分りの事と思ふ。」と言つてゐる。漱石は『明暗』に於いてある意味で百鬼夜行之圖を描き出したとは言つても、漱石はそれらの百鬼を憎みはしなかつた。寧ろ漱石はそれらの百鬼を憐んだ。自分の「生きてゐるうちは普通の人間の如く」自分の「持つて生れた弱點を發揮」して行くに違ひない、自分はそれが「生だと考へる」と言つた漱石は、それらの百鬼を憎むには、餘りに自分に——人間に愛想をつかし過ぎてゐたからである。然しその事は漱石が、他人もしくは自分の弱點を、弱點として見ないといふ事ではなかつた。それには漱石は、餘りに深く人間を愛した。人間を愛するが故に、さうして人間の弱點を憐むが故に、漱石は一層苛辣に、それを指摘するのである。『道草』で過去の自分自身の中に蠢動してゐた私の上に、敢て鋭いメスを加へた漱石は、丁度同じ心持で、津田とお延と、もしくは外のいろんな人の私の上に、鋭いメスを加へる。然も『明暗』の世界は『道草』の世界と

違つて、自分の體驗を遙に遠く自分から突き離れた、實驗味の勝つた世界であるだけに、漱石の眼は愈鋭く、漱石のメスは愈冴えて、獲物を追ふ隼のやうに、私を捕捉する事俊敏精刻を極めるのである。——然も漱石が私の捕捉にそれほど俊敏精刻を極めるといふ事は、一方から言へば、それだけ漱石に「則天去私」の世界が深まつて行つたといふ事を意味するものに外ならなかつた。自分の中の天が澄みきれば澄みきるほど、漱石にとつて、自分の中の、もしくは他人の中の私は、愈醜いものとして、顯著に目に立つて來る筈だからである。

勿論『明暗』がある意味での百鬼夜行之圖であるとは言つても、必ずしも『明暗』が百鬼計りで成立つてゐるといふ事を意味しない。いくら人間は私だらけで生きてゐるとしても、ある時ある場合にはその私の覆ひがとれて、奥の方から美しい天真が、顔を覗ける事もあり得るのである。もしくはその私とともに、奥の方の天真が、獨りでに流露する事もあり得るのである。『明暗』に於いて漱石は、所所にさういふ世界を點綴する。例へば病院に津田を見舞つて、お延と顔をつき合したお秀のやうなのが、それである。

お秀にはお秀流の私がある。その私の爲めにお秀は、お延を憎み、ひいてはそのお延の言ひなりになつて、お延の機嫌ばかりを取つてゐるらしい津田を、齒痒いものに眺めてゐる。然しそれ



とともにお秀には、誠實があつた。またお秀には、京都の父から送金を断られて、兄は嘸困つてゐるだらうと思ひ、然も自分の所天はその問題に多少關係してゐるといふので、この事で所天を煩はしては悪いといふ分別から、自分で必要な金額の才覺をして來るだけの、親切があつた。然しその親切は、津田とお延との敵對的な言動によつて、無残に蹂躪されてしまふ。それでもなお秀は、その金を兄の枕許に置いて歸つた。その代りお秀は、今まで自分が兄夫婦に就いて考へてゐた事を、兄夫婦の前に眞直ぐにぶちまけた。そのお秀の言葉は、美しいお秀を最も美しくする、誠實に充ちたものであつた。此所には私の影は、鶉の毛の先きほども見當らない。あるのはただ相手の爲よかれかしと念する、誠實のみである。もしくは相手の不誠實を粉碎したいと願ふ、義憤のみである。

勿論お秀のこの言葉は、敵對的な心持でお秀に對してゐる津田の心にもお延の心にも、なんの反響を起さなかつた。反響を起したとすれば、それは冷笑の反響を起した位のものである。従つてこのお秀の誠實は、適歸する所を知らない人魂のやうに、中有に迷つてゐなければならぬのではあるが、それにしても『明暗』の中にこのお秀の言葉が存在してゐるといふ事は、『明暗』の世界が百鬼計りで成立つてゐるのではないといふ事を證明するには、十分であると言つて可いであらう。——それのみではない。最後に一寸出て來るだけで、竟にその全貌を見る事を得なかつ

た清子の人となり就いて考へて見ても、此所には自然と純粹と誠實とに充ちた、殆んど私といふものから脱離してしまつたと言つて可い位の、「清」い人間の存在が仄めかされてゐるのである。また吉川夫人にしても、小林にしても、彼等はそれぞれの流儀で私を多分に持つてゐる人間であつたとしても、是亦ある時ある場合には、亦それその流儀で、或は誠實を發揮し、或は眞面目になつて、相手に働らきかける事を、決して忘れないのである。勿論その働らきかけは、或は正しい働らきかけではなかつたのかも知れない。またそれはお秀の場合のやうに、働らきかけられた相手が私に充ちてゐる爲に、その誠實もその眞面目も、正しい受け取り方で、受け取られる事がなかつたのかも知れない。それにも拘はらず、なほさういふものが『明暗』の中に存在してゐるといふ事實は、息苦しい『明暗』の世界の空氣に、何等かの意味で寛ろぎを與へるものである事は、言を俟たない。

同時にそれは、津田もしくはお延に對する、他人の卒直な、もしくは無遠慮な批評でもあつた。我我は、それらの批評を綜合する事によつて、津田もしくはお延の全貌を、概念的に把握し、それと實際の津田もしくはお延の言動とを照し合せる事によつて、津田その人もしくはお延その人の本質を把握する事を、容易にされる。その上作者は、到る所の地の文で、我我に、津田とお



延との弱點が何所と何所とにあつて、彼等はそれをどうすれば、ほんとの夫婦らしい夫婦として、朗らかな安らぎに充ちた生活を送る事が出来た筈であるかを、相當はつきり指摘して見せてゐる。その意味で『明暗』は、假令未完成の作品であるとは言つても、普通の未完成の作品とは違つて、既に今迄のままでも、作者が是を書かうとした意味の、凡その所は悉してゐると言つて可い、作品なのである。

お秀は兄夫婦を前に置いて、「私は何時かつから兄さんに云はう／＼と思つてゐたんです。嫂さんのゐらつしやる前ですよ。だけど、其機會がなかつたから、今日迄云はずにゐました。それを今改めてあなた方のお揃ひになつた所で申してしまふのです。それは外でもありません。よござんすか、あなた方お二人は御自分達の事より外に何も考へてゐらつしやらない方だといふ事なんです。自分達さへ可ければ、いくら他が困らうが迷惑しようが、丸で餘所を向いて取り合はずにゐられる方だといふ丈なんです」——「兄さんは自分を可愛がる丈なんです。嫂さんは又兄さんに可愛がられる丈なんです。あなた方の眼には外に何にもないんです。妹などは無論の事、お父さんもお母さんももうないんです」——「結果は一口で云へる程簡單です。然し多分あなた方には解らないでせう。あなた方は決して他の親切を受ける事の出来ない人だといふ意味に、多

分御自分ぢや氣が付いてゐらつしやらないでせうから。斯う云つても、あなた方にはまだ通じないかも知れないから、もう一遍繰り返します。自分丈の事しか考へられないあなた方は、人間として他の親切に應ずる資格を失なつてゐらつしやるといふのが私の意味なのです。つまり他の好意に感謝する事の出来ない人間に切り下げられてゐるといふ事なのです。あなた方はそれで澤山だと思つてゐらつしやるかも知れません。何處にも不足はないと考へておいでなのかも知りませぬ。然し私から見ると、それはあなた方自身に取つて飛んでもない不幸になるのです。人間らしく嬉しいる能力を天から奪はれたと同様に見えるのです。兄さん、あなたは私の出した此お金は欲しいと仰やるのでせう。然し私の此お金を出す親切は不用だと仰やるのでせう。私から見ればそれが丸で逆です。人間として丸で逆なのです。だから大變不幸なのです。さうして兄さんは其不幸に氣が付いてゐらつしやらないのです。嫂さんは又私の持つて來た此お金を見さんが貰はなければ可いと思つてゐらつしやるんです。さつきから貰はせまい／＼としてゐらつしやるんです。つまり此お金を斷ることによつて、併せて私の親切をも排斥しようとなさるのです。さうしてそれが嫂さんには大變なお得意になるのです。嫂さんも逆です。嫂さんは妹の實意を素直に受けるために感じられる好い心持が、今のお得意よりも何層倍人間として愉快だか、丸で御存じない方なのです」(第百九)と言つた。お秀が言ふまでもなく、「人間として他の親切に應ずる資格を失



な」ふといふ事、「他の好意に感謝する事の出来ない人間に」なり果てるといふ事は、人間として一番怖ろしい事であり、人間として一番不幸な事である。それは誠實に對するに誠實をもつてする事を忘れてゐる人間のする事だからである。然しお秀のこの言葉は、津田にもお延にも、少しも通じなかつた。従つて二人とも、お秀の言葉を噛み締めて、自分自身を反省しようなどとは、思ひも寄らなかつた。お延はお秀の歸つたあと、津田に向つて「秀子さんは、まさかキリスト基督教ぢやないでせうね」とまでも言つてゐる。此所にこの夫婦に共通する、第一の致命的な弱點があつた。「自分達の事より外は何も考へないといふ事は、結局自分の事より外は考へないといふ事を意味する。自分の事より外は考へないといふ事は、愛の名に値ひしない位低級な愛をしか、その人が持つてゐないといふ事を意味する。」

作者はある時のお延の心理を描寫して、かう言つてゐる。——「手前勝手な男としての津田が不意にお延の胸に上つた。自分の朝夕盡してゐる親切は、随分精一杯な積でゐるのに、夫の要求する犠牲には際限がないのかしらんといふ、不斷からの疑念が、濃い色でばつと頭の中へ出た。彼女はその疑念を晴らして呉れる唯一の責任者が今自分の前にゐるのだといふ自覺と共に、岡本の細君を見た。其細君は、遠くに離れてゐる両親を有つた彼女から云へば、東京中で頼りにする

たつた一人の叔母であつた。／「良人といふものは、たゞ妻の情愛を吸ひ込むためにのみ生存する海綿に過ぎないのだらうか」／是がお延のとうから叔母にぶつかつて、質して見たい間であつた。不幸にして彼女には持つて生れた一種の氣位があつた。見方次第では瘦我慢とも虚榮心とも解釋の出来る此氣位が、叔母に對する彼女を、此一點で強く牽制した。ある意味からいふと、毎日土俵の上で顔を合せて相撲を取つてゐるやうな夫婦關係といふものを、内側の二人から眺めた時に、妻は何時でも夫の相手であり、又會には夫の敵であるにした所で、一旦世間に向つたが最後、何處迄も夫の肩を持たなければ、體よく夫婦として結び付けられた二人の弱味を表へ曝すやうな氣がして、耻づかしくてゐられないといふのがお延の意地であつた。だから打ち明け話をして、何か訴へたくて堪らない時でも、夫婦から見れば、矢つ張り「世間」といふ他人の部類に入れば、此叔母の前へ出ると、敏感のお延は外間が悪くつて何も云ふ氣にならなかつた。／其上彼女は、自分の豫期通り、夫が親切に親切を返して呉れないのを、足りない自分の不行届からでも出たやうに、傍から解釋されてはならないと日頃から懸念してゐた。凡ての噂のうちで、愚鈍といふ非難を、彼女は火のやうに恐れてゐた。／「世間には津田よりも何層倍か氣六づかしい男を、すぐ手の内に丸め込む若い女さへあるのに、二十三にもなつて、自分の思ふやうに良人を綾なして行けないのは、畢竟知恵がないからだ」／知恵と徳とを殆んど同じやうに考へてゐたお延には、



叔母から斯う云はれるのが、何よりの苦痛であつた。女として男に對する腕を有つてゐないと自白するのは、人間でありながら人間の用をなさないと自白する位の屈辱として、お延の自尊心を傷けたのである。時と場合が、斯ういふ立ち入つた談話を許さない劇場でないにした所で、お延は黙つてゐるより外に仕方がなかつた。意味ありげに叔母の顔を見た彼女は、すぐ眼を外せた。」(第四十七)——お延には、瘖我慢とも虚榮心とも言はば言はれべき、「一種の氣位」がある。同時にお延には、「意地」がある。さうしてお延は、夫婦關係といふものを「ある意味からいふと、毎日土俵の上で顔を合せて相撲を取つてゐるやうな」ものであると考へ、「二十三にもなつて、自分の思ふやうに良人を綾なして行けないのは、畢竟知恵がないから」「腕」がないからであるとし、それが出来ないと自白する事は、「人間でありながら人間の用をなさないと自白する」に等しい事であるとして、誰にもそれを打ち明けまいとするほど、「自尊心」の強い女なのである。此所からお延の、嬌態や、技巧や、虚偽が出て来る。また此所からお延の、粗野で無遠慮な小林に對する、もしくは吉川夫人やお秀に對する、本能的な、動物的な、負けじ魂が出て来る。「知恵と徳とを殆んど同じやうに考へてゐた」お延は、天真や自然の尊い事を知る由もなく、勝氣で、先を越して、相手を支配して、自分の思ふ所へ連れて行きさへすれば、夫で自分は幸福であると考へてゐるのである。それだからお延は、絶えず武装してゐる。津田のゐない翌日に、思はず朝寐をして、

何か非常に自由な暢暢した心持になつても、もしくは叔父のうちを訪ねて、久しぶりに昔自分の居間であつた、今は繼子の居間である離れに這入り、其所で繼子と巫山戯て、硯箱の前に飾つてある一輪挿を引つ繰り返したりなぞしながら、「津田の前でかつて感じた事のない自由」な心持になつても、竟にそれが最も自然な姿に——武装を解いて裸になつたせゐるのでは、氣がつかないのである。さうしてお延は、絶えず自分と津田との、隔ての垣を意識するのである。吉川夫人は津田の前でお延を評して、「あの方は少し己惚れ過ぎてゐる所があるのよ。それから内側と外側がまだ一致しないのね。上部は大變鄭寧で、お腹の中は確かりし過ぎる位確かりしてゐるんだから。それに利巧だから外へは出さないけれども、あれで中々慢氣が多いのよ。だからそんなものを皆んな取つちまはなくつちや……」(第四百十二)と言つてゐる。誠實に、自然に、天真に、あるがままの姿で愛し愛されつつ、夫婦生活といふ創造生活を成就しようなどは、お延は夢想だもしてゐない。お延のやうな心構へから生れ得る夫婦生活は、結局「毎日土俵の上で顔を合せて相撲を取つてゐるやうな」、勝負の生活に過ぎないのである。

津田に就いて作者は、かういふ事を言つてゐる。——「彼は腹の中で、嘔吐な自分を肯がふ男であつた。同時に他人の嘘をも根本的に認定する男であつた。それでゐて少しも厭世的にならな



い男であつた。寧ろ其反對に生活する事の出来るために、嘘が必要になるのだ位に考へる男であつた。彼は、今迄斯ういふ漠然とした人世觀の下に生きて來ながら、自分ではそれを知らなかつた。彼はたゞ行つたのである。」(第百十五)——同じ作者は又別な所で、津田に就いてかういふ事を言つてゐる。——「彼は向ふの短所ばかりに氣を奪られた。さうして其裏側へ暗に自分の長所を點綴して喜んだ。だから自分の短所には決して思ひ及ばなかつたと同一の結果に歸着した。」(第百十五)——津田の學生時代からの友人である小林は、津田に向つて、「……要するに喧嘩から起り得る凡ての變化は、みんな僕の得になる丈なんだから、僕は寧ろ喧嘩を希望しても可い位なものだ。けれども君は違ふよ。君の喧嘩は決して得にやならない。さうして君程又損得利害をよく心得てゐる男は世間にたんとないんだ。たゞ心得てる許ぢやない、君はさうした心得の下に、朝から晩迄寐たり起きたりしてゐられる男なんだ。少くとも左右しなければならぬと始終考へてゐる男なんだ。……」(第百十九)と言つてゐる。——吉川夫人は、清子に會つて男らしく未練の片をつけて來いと、津田に勧めたにも拘はらず、津田がなんとなく澁つてゐる様子を見て、「貴方は臆病なんです。清子さんの前へ出られないんです」——「お待ちなさい。——貴方は勇氣はあるといふ氣なんでしょう。然し出るのは見識に拘はるといふんでせう。私から云へば、さう見識ばるのが取りも直さず貴方の臆病な所なんです、好ござんすか。何故と云つて御覽なさい。そ

んな見識はたゞの見榮ぢやありませんか。能く云つた所で、上つ面の體裁ぢやありませんか。世間に對する手前と氣兼ね引いたら後に何が残るんです。花嫁さんが誰も何とも云はないのに、自分で極りを悪くして、三度の御飯を控へると同じ事よ」——「つまり色氣が多過ぎるから、そんな入らざる所に我を立て、見たくなるんでせう。さうしてそれが貴方の己惚に生れ變つて變な所へ出て來るんです」——「貴方は何時迄も品よく黙つてゐようといふんです。ちつと動かすに濟まさうとなさるんです。それでゐて内心ではあの事が始終苦になるんです。そこをもう少し押して御覽なさいな。おれが斯うしてゐるうちには、今に清子の方から何か説明して來るだらう來るだらうと思つて——」——「いえ、思つてゐると同じだといふのです。實際何處にも變りがなければ、さう云はれたつて仕様がなぢやありませんか」——「一體貴方は圖迂々々しい性質ぢやありませんか。さうして圖迂々々しいのも世渡りの上ぢや一徳だ位に考へてゐるんです」——「いえ、左右です。其所がまだ私に解らないと思つたら、大間違です。好いぢやありませんか、圖迂々々しいで、私は圖迂々々しいのが好きなんだから。だから此所で持前の圖迂々々しい所を男らしく充分發揮なさいな。そのために私が折角骨を折つて拵へて來たんだから」(第百四十一)と言つてゐる。

津田は不純である。津田には誠實がない。津田は裏表のある、陰日向のある人間である。津田



は利害の打算を忘れる事がない。津田の動くのは、津田の人間としての自然が動くのではなくて、津田の打算が動くのである。この事は津田が、根本の意味では、他人をも自分をも信じる事の出來ない、また根本の意味では他人をも自分をも愛する事の出來ない、言はば動物的な意味に於いてのみ自分を愛してゐる人間である、といふ事を意味する。この事は絶えず津田を武装させ、絶えず津田を緊張させ、津田を注意深くし、津田の頭をよく廻るものにする。然も津田の注意と津田の頭の働らきとは、欺されまい欺されまいとするやうな、損をしまし損をしましとするやうな、さういふ損得利害の世界の中だけに出没してゐるのだから、津田の心には餘裕がなく、津田の世界は窮屈で、津田は「諧謔を解する事を知らなかつた。」(第百十五)殊に津田は、今のお延と結婚する以前の過去に、清子との戀愛事件を持つてゐた。天眞に、自然に、淡泊に、裸になる事の出來ない津田は、お延の前に自分を勉強家と見せかけ、もしくは金持の息子と見せかける事を好んだと同じやうな見榮から、この事をお延の前に告白する事の代りに、庭先で清子の手紙を焼いてしまつて、素知らぬ振をして通り抜けてしまはうとした。然し手紙は焼き悉されても、心の清子の印象は——どういふ理由とも自分には合點が行かないうちに、自分を棄てて去つた清子の印象は——焼き悉される事がなかつた。直覺力の鋭いお延は、直ちにそれを看破する。さうしてそれは、初めから眞正の意味では、心の肌と肌とを觸れ合せる事がなかつた二人の間の溝を、

一層深いものにする。「愛する人が自分から離れて行かうとする毫釐の變化、もしくは前から離れてゐたのだといふ悲しい事實を、今になつて、そろ／＼認め始めた」(第八十三)お延は、その相手が誰であるかを知る事が出來ないながら、假令その相手が誰であらうとも、自分が津田を愛してゐる以上、さういふ相手は拂ひ退けて、是が非でも津田に自分を愛させずには措かないといふ、堅い覺悟の下に、爾後の津田に立ち向はうとするのである。嘗て繼子に向つて、「あるのよ、あるのよ。たゞ愛するのよ、さうして愛させるのよ。さうさへすれば幸福になる見込は幾何でもあるのよ」——「誰でも構はないのよ。たゞ自分で斯うと思ひ込んだ人を愛するのよ。さうして是非其人に自分を愛させるのよ」——「誰だつて左右よ。たとひ今其人が幸福でないにした所で、其人の料簡一つで、未來は幸福になれるのよ。屹度なれるのよ。屹度なつて見せるのよ。ねえ繼子さん、左右でせう」(第七十二)と宣言した事のあるお延は、この所天の祕密が次第に確實に攫まれさうになるにつれて、命にかけても、自分の覺悟を貫ぬかうとするのである。

かうして勝氣な、意地つ張りな、二十三にもなつて所天を綾なす事が出來なければ、女の恥辱であるときまで考へてゐるお延は、あらゆる智慧を絞り、あらゆる嬌態とあらゆる技巧とあらゆる虚偽を悉して、所天の祕密を探り出さうとする。それに對して津田は、津田一流の用意と頭の働らきと打算とを擧げて、どうあつてもお延に、自分の祕密を握らせまいとする。お秀や吉川夫人



や、殊に小林を中に置いて、二人の暗闘は次第に灼熱する。もともと緊張して安き心のなかつたこの夫婦關係は、一層緊張し一層安き心のないものになる。二人の間には技巧に技巧が重なり、虚偽の上に虚偽が積まれ、私は私を生んで、人間の業は測り知るべからざる深さに到達する。

相手を愛し、且つその相手の愛を必死に要求してゐる點から言へば、利害の打算計りに没頭して、相手を愛してゐるのかゝるのか分らないやうな津田に比べて、お延の方が遙に人間らしい心持を示してゐる事は、言ふまでもない。然しお延の愛は、自分の相手を排他的に獨占しようとする愛であつて、其所には理非も正邪もない、只管に私もしくは我の愛があるのみである。殊にお延は、自分でかうと思ひ込んだ以上、是が非でも其人に自分を愛させずには措かない、さうして幸福になるのだと言つてゐる。是は相手を強制する事であつて、相手と融合する事ではない。さうして是は相手を人間としてではなく、物として愛する愛である。然もお延は、それを間違つた事であるなどは、少しも反省しない。漱石はその事に就いて「……實をいふと、勝負は彼女に取つて、一義の位をもつてゐなかつた。本當に彼女の目指す所は、寧ろ眞實相であつた。夫に勝つよりも、自分の疑を晴らすのが主眼であつた。さうして其疑ひを晴らすのは、津田の愛を對象に置く彼女の生存上、絶対に必要であつた。それ自身が既に大きな目的であつた。殆んど方便

とも手段とも云はれない程重い意味を彼女の眼先へ突き付けてゐた。／＼彼女は前後の關係から、思量分別の許す限り、全身を擧げて其所へ拘泥こだはらなければならなかつた。それが彼女の自然であつた。然し不幸な事に、自然全體は彼女よりも大きかつた。彼女の遙か上にも續いてゐた。公平な光りを放つて、可憐な彼女を殺さうとしてさへ憚らなかつた。／＼彼女が一口拘泥するたびに、津田は一足彼女から退ぞいた。二口拘泥れば、二足退いた。拘泥るごとに、津田と彼女の距離はだん／＼増して行つた。大きな自然は、彼女の小さい自然から出た行爲を、遠慮なく蹂躪した。一步ごとに彼女の目的を破壊して悔いなかつた。彼女は暗に其所へ氣が付いた。けれども其意味を悟る事は出来なかつた。彼女はたゞそんな筈はないとばかり思ひ詰めた。さうして遂にまた心の平靜を失つた。」(第四百十七)と言つてゐる。お延の津田に對する言動は、お延の自然から出たものであつたには違ひない。然しその自然は、寧ろ動物の自然であつて、人間の、もしくは天の自然ではなかつた。漱石から言へば、愛にも幾つもの層があるやうに、自然にも幾つもの層があるのである。もしくは階段があるのである。従つて「暗に其所へ氣が付いた。」としても、竟に「其意味を悟る事」の出来ない者は、その「小さい自然」に押し流されながら、當然又その「小さい自然」の爲に苦しまなければならぬのである。



是に反して津田は、さういふ自然をさへも持つてゐないやうに見える。勿論いくら津田でも、是ほど緊張した夫婦関係が、自分にとつて苦痛の上もない夫婦関係である事は、承知してゐない筈もないのである。それだからこそ津田は、吉川夫人の助言に聽いて、湯河原に清子を訪ね、男らしく未練の片をつけて來ようとしたのであつたには違ひなかつたが、然しさういふ事をするまでもなく津田は、自分とお延との間に起つた事件のうちで、自分に寛ろぎを興へたものが、どういふ事であり、それが何所から來たのであるかといふ事を、深切に反省して見さへすれば、自分自身の心構へ一つで、それはどうでもなる事だといふ事に、とうの昔氣がついてゐる筈だつたのである。漱石は、到る所で、その事を指摘してゐる。例へば漱石は、お秀が兄の枕元に金を置いて去つたあと、津田とお延との會話を一くさり續けて置いて、二人の心理状態の描寫に移り、其所でかういふ事を言つてゐる。——「二人は何時いつになく融け合つた。／今迄お延の前で體面を保つために武装してゐた津田の心が吾知らず弛んだ。自分の父が鄙吝らしく彼女の眼に映りはしまいかといふ掛念、或は自分の豫期以下に彼女が父の財力を見縊りはしまいかといふ恐れ、二つのものが原因になつて、成る可く京都の方面に曖昧な幕を張り通さうとした警戒が解けた。さうして彼はそれに氣付かずにゐた。努力もなく意志も働かせずに、彼は自然の力で其所へ押し流されて來た。用心深い彼をそつと持ち上げて、事件がお延のために彼を其所迄運んで來て呉れたと

同じ事であつた。お延にはそれが嬉しかつた。改めようとする決心なしに、改たまつた夫の態度には自然があつた。／同時に津田から見たお延にも、亦それと同様の趣が出た。餘事は暫らく問題外に措くとして、結婚後彼等の間には、常に財力に關する妙な暗闘があつた。さうしてそれは斯う云ふ因果から來た。普通の人のやうに富を誇りとしたがる津田は、其點に於て、自分を成る可く高くお延から評價させるために、父の財産を實際より遙か餘計な額に見積つた所を、彼女に向つて吹聴した。それ丈ならまだ可かつた。彼の弱點はもう一步先へ乗り越す事を忘れなかつた。彼のお延に匂はせた自分は、今より大變樂な身分にゐる若旦那であつた。必要な場合には、幾何いくばくでも父から補助を仰ぐ事が出來た。たとひ仰がないでも、月々の支出に困る憂は決してなかつた。お延と結婚した時の彼は、もう是丈の言責を彼女に對して脊負つて立つてゐたのと同じ事であつた。利巧な彼は、財力に重きを置く點に於て、彼に優るとも劣らないお延の性質を能く承知してゐた。極端に云へば、黄金の光りから愛其物が生れると迄信する事の出來る彼には、何うかしてお延の手前を取繕はなければならぬといふ不安があつた。ことに彼は此點に於てお延から輕蔑されるのを深く恐れた。堀に依頼して毎月父から助けて貰ふようにしたのも、實は必要以外に斯んな魂膽が潜んでゐたからであつた。それでさへ彼は何處かに畑たい所を有つてゐた。少くとも彼女に對する内と外には大分の距離があつた。眼から鼻へ抜けるやうなお延にはまた其距離が



手に取る如くに分つた。必然の勢ひ彼女は其所に不満を抱かざるを得なかつた。然し彼女は夫の虚偽を責めるよりも寧ろ夫の淡泊でないのを恨んだ。彼女はたゞ水臭いと思つた。何故男らしく自分の弱點を妻の前に曝け出して呉れないのかを苦にした。仕舞には、それを敢てしないやうな隔りのある夫なら、此方にも覺悟があると一人腹の中で極めた。すると其態度がまた木精のやうに津田の胸に反響した。二人は何處迄行つても、直に向き合ふ譯に行かなかつた。しかも遠慮があるので、成るべく其所には觸れないやうに慎んでゐた。所がお秀との悶着が、偶然にもお延の胸にある此扉を一度にがらりと敲き破つた。しかもお延自身毫も其所に氣が付かなかつた。彼女は自分を夫の前に開放しようといふ努力も決心もなしに、天然自然自分を開放してしまつた。だから津田にも丸で別人のやうに快よく見えた。」(第百十三)——もし津田が、この心持の變化を樂しむとともに、この心持の變化の由つて來る所を、深切に反省して見るならば、自分が相手と「直に向き合ふ」氣で、「男らしく自分の弱點を妻の前に曝け出し」さへすれば、いかに容易に自分とお延との間が、光風霽月のやうな朗らかにになり得るものであるかに、すぐ氣がついてゐる筈である。然るに津田は、さういふ點を反省して見る事がなかつた。従つてこの事件の「意味を悟る」事がなかつた。のみならず津田は、別な場合には、お延を扱ふ事に成功して、「畢竟女は慰撫し易いものである」(第百五十)といふやうな、もしくは「慰撫に限る。女は慰撫さへすれば何うにかなる」(第百五十一)といふやうな、女を物としてしか取り扱はない、不誠實な、すれづからしの理論を振り翳して、いい氣になつてゐるのである。言はば其所に、津田の業があつた。従つて津田は、「大きな自然」が自ら手を下して、もしくはその「大きな自然」が何人がを自分の傀儡に使つて、それを洗ひ淨めてくれるまでは、いつまでもその業から離脱する事が出來ないのである。——是から朝鮮に向つて去るといふ小林は、津田の前に、さんざ津田の弱點を暴露した揚句、「よろしい、何方が勝つかまあ見てゐる。小林に啓發されるよりも、事實其物に戒飭される方が、遙かに觀面で切實で可いだらう」(第百六十七)といふ、薄氣味の悪い捨臺詞を残して、津田と別れる。

津田が果して小林のいふやうに、「事實其物に戒飭される」ものかどうかは、『明暗』が未完成のまままで終つてゐるのだから、確實には分からない。然し『明暗』全篇に與へられた傾斜から考へると、小林の豫言は、同時に作者の豫言であり、最後に津田が「事實其物」によつて「觀面」に「切實」に「戒飭される」事は、殆んど疑ふべからざる事實であつたやうに思はれる。さうでもしなければ津田は、津田の業から救拔される期が、竟にないのではないかと思はれるのである。



昭和十二年三月五日印刷  
昭和十二年三月十日發行

漱石全集第九卷

(大森製本)

著作權者

夏目純一

編輯及發行

漱石全集刊行會

右代表者

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地  
岩波茂雄

印刷者

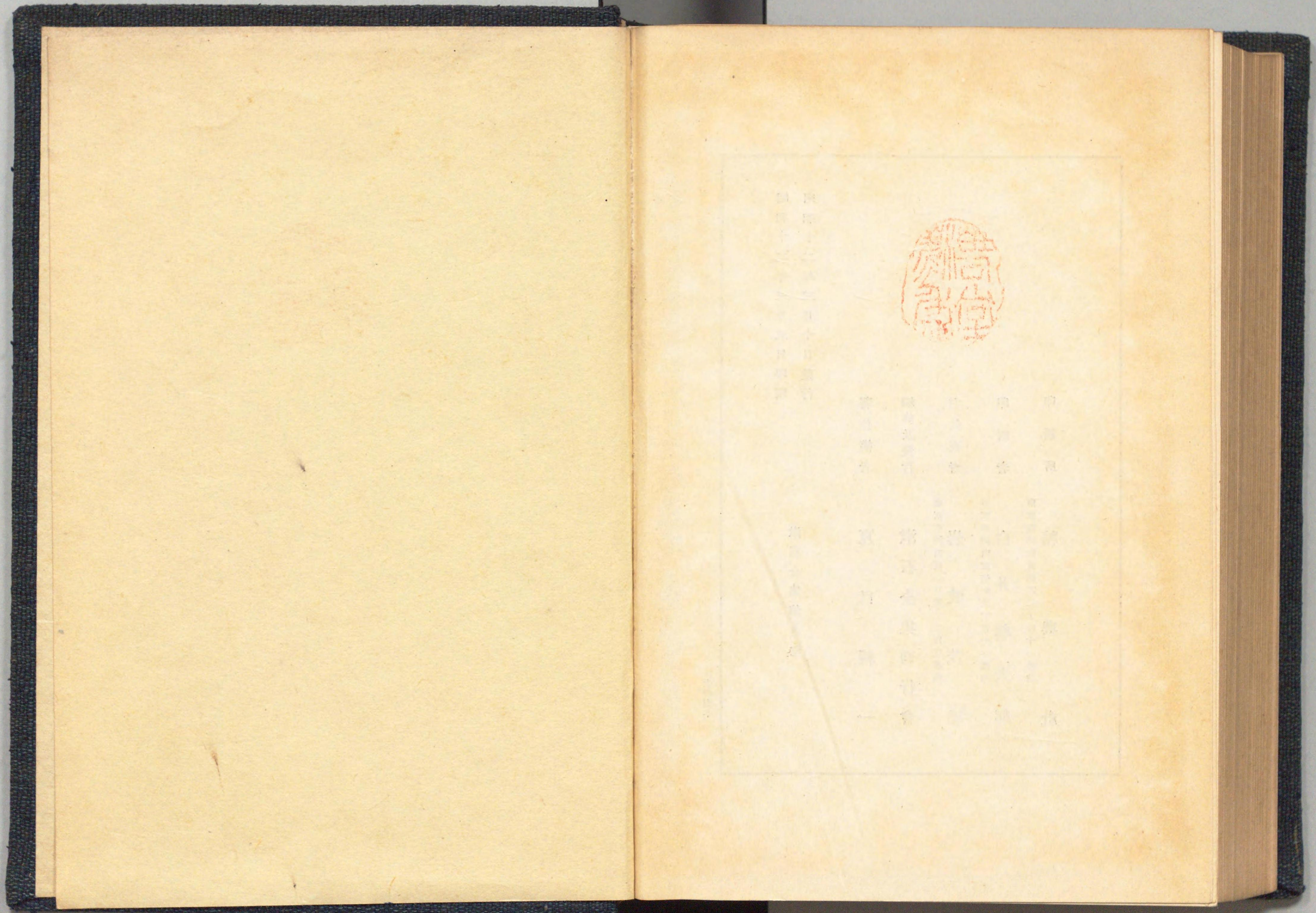
東京市神田區錦町三丁目十一番地  
白井赫太郎

印刷所

東京市神田區錦町三丁目十一番地  
精興社







Faint rectangular border containing illegible text, possibly a table or list of items.



